

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	藤 翔 平
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
幼児の役割遊びと自己調整機能の発達の関連			
論文審査担当者			
主 査	教 授	杉 村	伸一郎
審査委員	教 授	湯 澤	正 通
審査委員	教 授	森 田	愛 子
審査委員	准教授	清 水	寿 代
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、役割遊びが自己調整機能の発達に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、幼児期における役割遊びと自己調整機能の関連を検討したものである。役割遊びは、幼児期に特有の役割を演じるふり遊びであり、自己調整機能は、個人にとって重要な目標を達成するために、状況に合わせて自身の思考や感情、行動を制御する能力である。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、第1節で、ふり遊び及び役割遊びと自己調整機能の関連を調べた先行研究のレビューを行い、第2節で、その問題点を指摘するとともに本研究の目的を設定している。先行研究の第1の問題点としては、他の遊びがどの程度自己調整機能と関連しているかについてふり遊びと比較した研究が少ないことを指摘した。そして本研究では、役割遊びと他の遊びの中で見られる自己調整機能を比較することを目的とした。第2の問題点として、ふり遊びの中で自己調整的言動を働かせている子どもが、ふり遊び以外の場面でも自己調整機能を発揮しているかを検討した研究が少なく、さらに、ふり遊びの頻度と質も含め、ふり遊び内外の自己調整機能の関連を検討した研究が存在しないことを指摘した。そして本研究では、役割遊びの頻度や質、役割遊び中の自己調整機能と、役割遊び以外の文脈の自己調整機能の関連を検討することを目的とした。第3の問題点として、先行研究では、自己調整機能がふり遊びの発達を予測するという逆の因果関係や、ふり遊びと自己調整機能が相互に関係しあう双方向的な因果関係が検討されていないことを指摘した。そして本研究では、役割遊びと自己調整機能について縦断的に調査を行い、役割遊びと自己調整機能の関連において双方向的な因果関係を検討することを目的とした。</p> <p>第2章では、自然観察と保育者評定により収集したデータの分析を行っている。第1節では、年中児と年長児32名を対象に、役割遊びと他の遊びを観察し、自己調整的言動の頻度を比較した結果、メタ認知的調整のプランニングにおいて、役割遊びにおける頻度が構成遊び、機能遊びよりも有意に多いことが明らかになったが、自己調整機能の多くの側面においては、他の遊びでも役割遊びと同程度に、自己調整機能が働いていることが示唆された。第2節では、年中児と年長児55名を対象に、直近3か月における役割遊びの頻度ならびに役割遊び以外の文脈における自己調整機能を測定する Child Behavior Rating</p>			

Scale (CBRS) の評定を保育者に依頼した。その結果、役割遊びの頻度ならびに役割遊び中の自己調整機能と CBRS の間で中程度の有意な相関が見られたが、役割遊びの頻度と役割遊び中の自己調整機能の間の相関は弱く有意でなかった。

第 3 章では、遊びの中で見られる自己調整機能の評定を観察で行うとサンプル数を増やすのが困難であるため、自己調整機能の中のメタ認知的調整を測定する保育者評定の質問紙を開発し、年中児と年長児 142 名に関して収集したデータの分析を行っている。第 1 節では、役割遊びと構成遊び、機能遊びを比較するために、月齢を統制した共分散分析を行った結果、3 種類の遊び間でメタ認知的調整に有意差は見られなかった。第 2 節では、役割遊びの頻度や質と役割遊び内外の自己調整機能の関連を検討したところ、役割遊び中の自己調整機能と頻度や質との間に中程度の有意な相関が見られた。CBRS の下位尺度である Classroom Self-Regulation に関しては、役割遊びの頻度との間には弱い有意な相関が見られたが、役割遊び中の自己調整機能との間には相関がほとんど見られなかった。

第 4 章では、役割遊びと自己調整機能の因果関係を検討するために、年少児と年中児 140 名を対象に、3 時点 (2021 年 3 月, 2021 年 10 月, 2022 年 3 月) の縦断研究を実施している。共分散構造分析を行い、役割遊びの頻度・質と自己調整機能 (Classroom Self-Regulation) について、自己調整機能が役割遊びを予測するという当初の想定とは逆の因果関係や、役割遊びと自己調整機能が相互に影響し合う双方向的な因果関係がないかを検討するために交差遅延モデルによる分析を実施した。その結果、1 時点目の自己調整機能が 2 時点目の役割遊びの頻度を負に予測した一方、役割遊びの頻度や質が自己調整機能を予測する因果関係は見られなかった。また、1 時点目の頻度が 2 時点目の質を予測し、2 時点目の質が 3 時点目の頻度を予測するという結果が得られた。

第 5 章では、本論文の成果をまとめ、今後の課題として、より低い年齢の子どもを対象に含める点や、新たに開発した尺度の信頼性と妥当性の検討などを挙げている。

本論文は、次の 4 点で高く評価できる。

1. 従来の国内の役割遊びの研究は、役割遊びの過程や構造に焦点を当ててきたのに対して、役割遊びが自己調整機能の発達に及ぼす影響に着目し、観察や質問紙を工夫することにより自己調整機能を測定した。
2. 役割遊びでは他の遊びに比べて遊びを計画する言動が多く見られることを示すとともに、役割遊びと同様に他の遊びでも自己調整機能が働いている可能性を示唆した。
3. 役割遊びの頻度や質、役割遊び内外の自己調整機能を総合的に検討することにより、役割遊びの頻度が役割遊び以外の文脈における自己調整機能と関連すること、役割遊びの中で見られる自己調整機能が、役割遊びの頻度や役割遊び以外の文脈における自己調整機能と必ずしも関連するとは限らないことを示した。
4. この研究テーマにおいては世界でも先駆的な 3 時点の縦断的調査により、自己調整機能が高まった子どもは役割遊びをしなくなる可能性を示すなど、自己調整機能が役割遊びを予測するという従来の前提とは異なる因果関係を明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (心理学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5 年 2 月 16 日